

二つになる

山田志穂

人物

男

女

ある町の、ある金曜の日暮れがた。
もうすぐ4月になる。日が長く、まだ明るい。
ある喫茶店で過ごす二人について。

音楽。明転。

舞台中央にテーブルと椅子がある。窓際二人席。
客席は店の外である。

テーブルの上にはコーヒーが二つ提供されている。
下手席に男が座り、ぼんやりと窓の外を眺めている。

女、上手奥より入場。慌ただしく駆け寄り、席につく。

女 (手を拭きながら) ごめんごめん。

男 (コーヒーを指し) 来てるよ。

女 ありがとう。

男 大丈夫？

女 うん。

男 まだ良くならないの。

女 ー。最近は少し落ち着いてたんだけど。

男 病院は。

女 行ってる行ってる。

男 松本さんそこ。
 女 うん。あ、いや。今は違う。
 男 松本さんとこ先生変わったんだよ。息子さんになって。
 女 ああ。あんまりなの。
 男 ううん。いいか悪いかまだ分かんなかったんだけど。
 女 若いし男の人だしね。前はおじいさんだったからさ、いまさら
 女の子の体なんか興味ありませんねって感じだったから。
 男 気楽で良かったんだけど。
 女 そうなんだ。
 男 うん。けど。ちょっと行きづらくなっちゃってね。
 女 まあ遠くなったのもあるし。
 男 ああ。
 女 で今は違うところ行ってる。
 男 へえ。
 女 ネットで見つけたとこ。先生女の人でね。わりと混んでて。
 男 良さそう？
 女 どうかな。まだ分かんない。けどしばらく通ってみる。
 男 そう。
 女 うん。

沈黙が流れる。

女 なんか。
 男 ん。
 女 どうだい。最近。
 男 うん。んー。特に変わらないよ。
 女 あ、そう。忙しい？
 男 まあ忙しいと言えば、うん。忙しいかな。
 女 年度末、
 男 ああそうね、年度末のいつもの（感じ）
 女 だよ。帰り遅いんですよ。
 男 うん。みんな残ってる。
 女 あ。ごめん忙しい時に。
 男 あ、いや。大丈夫それは。
 女 けど合わせてもらって、
 男 いや本当。最近残業するなって言われてて。
 女 今日もノー残業デーだから。
 男 へえ。そんなのできたの。
 女 六時半に見回り来るから。それまでに帰って。
 男 へえ。見回り。厳しいね。
 女 うん。
 男 でも残りたいときもあるんですよ。
 女 まあ。
 男 絶対帰らなきゃだめなの？

男 いや、早めに言えば。
女 ああ申請するのか。
男 うん。
女 紙で？
男 そう。
女 えー。それもめんどくさいなあ。
男 うん。だから、誰も残らない。
女 まあ。じゃなきゃみんな残っちゃうもんね。
男 そうだね。
女 ふうん。そっか。

またしても沈黙が流れる。
女、コーヒーに手を伸ばす。が、まだ熱い。
カップの位置を変えたり向きを整えたり、テーブルの傷を撫でて
みたりしている。

男 もう落ち着いたの。
女 ン？
男 えっと、家。
女 ああ。まあ。とりあえず生活はできてる。
まだ箱だらけだね。

男 そう。
女 うん。あ、いい部屋だよ。家賃の割には綺麗だし。無駄に広い。
男 いいじゃん広い部屋。
女 広いっていうか二部屋もいらなかったかな。一個は物置。
男 もったいない。
女 あ、でも楽だよ。邪魔なものとかとりあえず入れとけるし。
男 ふーん。
女 洗濯物も広々干せるし、
男 手伝う？
女 え。
男 手伝おうか。
女 なんて。
男 なんて。箱だらけなんでしょう。
女 おお。そっか。
男 他に何が、
女 ふ。洗濯。はは。
男 いや。なんか整頓とか片付けとか、
女 重いもの運んだりとか？
男 ン？うん。
女 ンー。まあ。いいよ。
男 いいの。
女 いいよ。いい、いい。急ぎじゃないし悪いし。
男 そうか。

間。

男 なんかあるの。
女 え。
男 運ぶもの。
女 ……
男 重いもの。あるの。
女 ……うん。
男 なに。
女 冷蔵庫。
男 重。
女 いやいやいや業者さんがね、どこ置きますかって言うから、
男 台所。
女 いやいや一旦ね、一旦置くのかなと思って。
男 だって冷蔵庫って大体台所だし台所のどこ置きますかって
女 わざわざ聞かなくても大体決まってくるし。なのにわざわざ
男 聞くから。ああ一旦、とりあえず、どっか置きたいのかなあ？
女 っと思って。え思うよね？
男 うん？（思うかな？と）
女 で。入ってすぐの部屋に仮に。

男 うん、まあ。仮にね。
女 そしたらバタバタしてるうちに業者さん帰って。
男 そのまま？
女 うん。
男 ええー。
女 ええーだよ。ふふ。
男 なに。
女 いや、業者さん帰るでしょ。玄関見送って、で寝室入ったら、
男 んふふ冷蔵庫いて、
女 うわしかも寝室。
男 そうそうそう。入って、うお（ビクツとなる）ってふふ。
女 まさかそんなとこに冷蔵庫いると思わないから、うおって。
男 一瞬人かと思って、え、冷蔵庫？ええーって。
女 楽しそうだなによりだよ。
男 うおって、
女 もう一回呼べばよかったのに。
男 いやなんていうか、結構急いでる感じだったんだよ。
女 もっかい呼んで「冷蔵庫だけお願いしますね」ってなんか、
男 申し訳なくて。
女 いやいや。その状況で「えっ！そんなことのために僕らまた
男 呼ばれたんですか。」ってならないよ普通。
女 そうかなあ。
男 あっちのミスでもあるんだから。

女 えー。うん。

男 まあ嫌な顔されたとしても、それは、

女 (遮って)分かるよ。分かるけど。言えないんだよそういうの。

男 悪いなああって思っちゃうし悪いなああって思うの嫌だなああって思っちゃうし。

男 ー。まあ……それでずつと？

女 うん。

男 不便でしょう。

女 それがね。うまいことコンセントの近く置いてくれたから。

男 使えないことなくて。

女 置いてくれたっていうか、それなんかあれだけど。

男 冷蔵庫がない台所ってなかなかいいんだよ。あれがあるか

女 無いかで部屋の密度が違うっていうのかな。すつきりしてね。

男 なんとなく台所明るくなった気がする。

女 そうなの。

男 うん。最初は寂しかったんだけどね。

女 寂しい？

男 だってそこにあるはずのものが無い、寂しいよ。

女 こういうのってさ、体が感覚的に覚えてんだらうね。台所には

男 冷蔵庫があるはずだ。あの圧迫感を無意識に受け入れて

女 たんだらうね。それがなくなったらそりゃあ物足りない感じ

男 するよ。でもね、慣れたら意外と、うん。どうしても台所に

女 必要かって聞かれたら、いやさうでもないんじゃないかな

男 っと思うようになってくるんだよ。

女 (へえ……(分らない)

男 冷蔵庫との距離感が変わるんだよ。

女 まあ近づいてきてるからね。

男 え、遠くなってるでしょ。

女 どうして。朝起きたらいるんでしょ寝室に。

男 ああ。なるほど。

女 ああ、台所から遠いってこと。

男 そうそう。本来あるべき場所っていうか。

女 台所とは限らないよ。

男 冷蔵庫？

女 寝室にある家もあるんじゃないのって。

男 なんかついお金持ちの家じゃないのそれ。

女 そうかな。

男 6畳とか8畳とかじゃなくてさ、高級ホテルの最上階の、

女 なんとかルームみたいな、

男 えっと、

女 グランド？プライベート？

男 わかった、スイートルーム。

女 ああ、それぞれ。スイートルームの寝室みたいなさ、

男 起きてそのまんまベッドの上で朝ご飯食べてますみたいな

女 そーゆー寝室にあるなら分かるよ。

男 冷蔵庫。

女 うん。
 男 …（想像して）いや、やっぱりありだと思う。
 女 寝室にい？
 男 そんな大きいじゃなくて。50リットルくらいの、
 女 出た。
 男 え？
 女 出ましたー。君いつも冷蔵庫の大ききリットルで言うよね。
 男 それが何。
 女 普通言わないよリットル。
 男 いや言うでしょう。電気屋で「何リットル以上はこちら」とか
 女 書いてあるでしょう。
 女 電気屋で見るのは分かるけどさ。こういう日常会話の中で
 何リットルの冷蔵庫とか普通絶対言わないって。
 男 「こないだ冷蔵庫新調したんだよ。」「へー、何リットル？」
 女 っって聞く？聞かないよ普通。
 男 俺は聞くけどな。
 女 うん、君は聞くだろうね。家電好きだもんね。
 男 別に好きじゃないよ普通だよ。
 女 いやそれは好きな部類に入ってるよ。好きだから何リットル
 とか聞くんだよ。
 男 好きとかじゃなくて。感覚的に分かるものじゃないの。
 女 50リットルはこれくらい、500はこれくらいって。
 女 ああ50ってそんな小さいの。

男 うん。小型。
 女 あのサイコロみたいなやつ？
 男 サイコロ…？
 女 真四角の、あの、一泊八千円位の安い温泉に置いてある、
 男 ああ。1ドアの。
 女 出た。
 男 また？
 女 出ましたー。ドア。
 男 今度は何。
 女 ドアの数とか言われても分かんないって冷蔵庫。
 男 いやそれはさすがに分かるでしょう！そのまんまじゃないの。
 女 まあ（ドアを開ける動作）このドアはまだ分かるよ。
 男 けど（野菜室を開ける動作）これもドアってどういうこと。
 女 どうって。
 男 これ（野菜室）はドアじゃないでしょ。
 女 まあ、引き出し？
 男 なのに、6ドアタイプとか言うでしょ。
 女 1ドアと2ドアは（ドアを開け）分かる。けど、3から先は
 （野菜室を開け）こう。4, 5, 6って。これドアじゃないよ。
 男 ああー。気になったことないな。
 女 そう。君はいつもドアって。
 男 変だなって、
 女 うん。思ってた。

男 まあ言いたいことは分かんなくもない。

女 でしょ。

男 けど、取扱説明書に書いてあるからなあ。

女 それじゃ説明書読む人しか分かんないことになるよ。

男 説明書は普通読むんだよみんな。

女 君あれも読んでたもんね。うどんの袋。

男 うどん？

女 うん。冷凍うどん。解凍するときにさ。「裏表逆だよ」って

男 言ってきたことあったじゃん。覚えてない？

女 あったかな。

男 あったあった。お皿に乗せるのをさ、袋のつなぎ目？上向けるんじやないのって。袋に書いてある絵がそうなるって。

女 よく覚えてるな。

男 めんどくさって思ったから覚えてる。

女 おい。

男 だって絶対どっちでもいいよ。

女 いや、つなぎ目は上に向けた方がいいよ。

男 でも袋の説明に「つなぎ目は上に」なんて書いてなかったよ。

女 そうだけど、絵がそうなるから。

男 絵は一例なんだって。

女 いや。絵は見本なんだよ。

男 一緒でしょ。

男 例と見本は全然違うよ。

女 えー。

男 あれも。牛乳パックも。

女 牛乳パック？

男 俺ずっと気になってたんだよね。

女 え。なに。

男 切り方。

女 普通に絵のとおりやってたよ。

男 いや。底の残し方が違うなあって。いいんだけど。

女 そのこのこしかた…

男 開いて、右から二番目に底残すんだよ。

女 そういう絵になってるの？

男 うん。

女 え。私は。

男 いつも一番右に残してた。

女 あー…？そうだった。

男 うん。

女 わ。それ嫌だったの。

男 嫌っていうか。ちよつと気になるなあって。

女 言ってくれたらよかったのに。

男 いや。どっちでもいいじゃんって言うと思って。

女 おお。言いそう。

男 うん。だから。絵も見えないだろうなって。

女 はは。すごいね。よく分かってる。

男 説明書も。
 女 読みとうないのう。
 男 日本語どうした。
 女 もしかしていつも読んでた？
 男 読んでたよ。
 女 うわーありがとう。
 男 ありがとうって何。
 女 一家で誰か一人読んだらクリア。
 男 読みなよって言っても読まないから。
 女 うん。どうしても読む気になれない。でもさすがに洗濯機とか高級品だし、読まなきゃって思っはいたんだよ。
 男 本当？
 女 ほんとほんと。だから机の上に置いてはいた。
 男 ああ。あれ読むつもりで。
 女 うん。けど気づいたら無くなってたから、まいったよ。
 男 俺が読んで片付けてたんだよ。
 女 まあ。君しかいないと思っはいましたよ。
 男 今の冷蔵庫は。
 女 私が読まんといかん。
 男 読んだ？
 女 いや。まだ。
 男 でしょうね。
 女 ちゃんと置いてあるよ。冷蔵庫の近くに。

男 寝室ね。
 女 はは。いやでもほんと、寝室も悪いことばつかじゃないよ。
 男 わけもなく開けたりしなくなったし、ちゃんと目的を持って近寄るようになったし。まあそういう目的。
 女 だっ行って帰って一往復で済ませたいからさ。何回も رفتり来たりしたくないじゃん。台所帰ってきて「あー、あれ忘れたー」ってもう、あーってなる。だから、台所を出る時にまず、一旦考える。こう、頭の中に思い浮かべて、行って、もうできるだけたくさん、持てるだけ持って帰ってくるのね。こう、両手と肘とか腕とかこう、（抱える仕事）うまいこと、工夫して持つて。
 男 かごか何か使ったら。
 女 かご使ったらそりや楽だよ。
 男 あるよ。
 女 （じゃ、なぜ？と）
 男 不便を味わってるんだよ。頭使って考えて、工夫してさ。
 女 かご使ったらそりや便利だろう、廊下がぬるつとしたりしないだろう。けどさ、
 男 早速なんか落としてるじゃん失敗じゃん。
 女 あ！失敗はね成長の……ん？あの……人生の……人生に？おける……？ああもう！とにかくそーゆーあれだよ！

男 (吹き出す)
 女 お。ウケた？
 男 いや。どうぞ続けて。
 女 うん。
 男 うん。で。
 女 まあ。終わり。
 男 急。
 女 これ何の話。
 男 えっと。冷蔵庫。
 女 あそうだ。
 男 動かす？そのままいく？
 女 いやもう…不便は充分楽しんだっていうか。
 男 そうですか。
 女 けど、
 男 なら、
 女 やっぱいい。
 男 え。いいの。
 女 うん。
 男 不便なんでしょう。
 女 うん、だから。誰かに頼むか、なんとかかする。
 男 俺行くのに？
 女 んー。ありがたいんだけど。なんか、んー。
 男 来られると困る？

女 ううん困らないよ嬉しいよ。でも。
 男 来てもらうでしょ。で冷蔵庫動かすでしょ。
 女 そのために行くからね。
 男 でき、帰るじゃん。
 女 帰るね。
 男 それがつらい。
 女 つらい。
 男 そう。
 女 帰るのが。
 男 来てもらうでしょ。で冷蔵庫動かすでしょ。
 女 で、ありがとう助かったよって言うでしょ。
 男 それは好きにしたらいいけど。
 女 で、じゃさよならってのもあれだから、お茶でも入れる？
 男 って言うでしょ。
 女 でしょって(言われても)
 男 言います。
 女 はい。
 男 そしたら。こたつ入ってお茶飲んでね、なんかかんや
 女 しょーもないことを話すでしょ。
 男 まだこたつ出してるの。
 女 片付ける予定ないよ。
 男 片付けなさいな…
 女 そんなでいい時間になって、帰ろうかなってなる。

女、テーブルに顔を近づけて書き始める。
筆記音が響く。丁寧に書いている。

男、女の手元を見たり顔を見たり、店内を眺めたりして
落ち着かない。

少しの間、何もない空間を見つめ、意識を窓の外へやる。

女 (書きながら) なんか。静かだね。
男 うん。
女 お客さんいないね。
男 うん。
女 明日休みなのにね。
男 うん。
女 まあ休みとか関係ないか。
男 うん。
女 君は「うんしか言わないマシン」か。
男 うん。
女 …… (男を見る)
男 …… (心ここにあらず、外を眺めている)
女 …… (心ここにあらず、外を眺めている)

男 ん？いや特に。

女 なんか喋って。

男 なんか喋って。

女 あ！実況してよ。

男 …… (紙を覗き込み) これから書こうとしているのは、

違ふこれじゃなくて。なんかさ。こっから見える景色とか

起こることとかの実況。してよ。ラジオラジオ。

男 それ面白いの。

女 面白いさ。

男 面白いかな。

女 面白いって。

男 気散らない？

女 散らない散らない。シーンとしてる方が落ち着かないもん。

男 そうなの。

女 勉強と一緒に。図書館よりリビングの方が集中できる人。

男 まあ、それは分かる。

女 でしょ。だからなんか喋って。

女、再び書き始める。

男、しばらく考えて、

男 ……時刻は夕方6時を回りました。ラジオをお聞きの皆さん

こんばんは。

女 おお？こんばんはー。

男 最近すっかり暖かくなってきましたよね。街行く人たちの服

装も明るい色合いが増えてきて、春はもう目の前って感じで

女 しょうか。僕も毎日ワクワクしちやつてたまらないですよー。

男 おおーいいねいいねえ。ラジオ。

女 さて、それでは早速、今週もこのコーナーから参りましょう。

男 「今日の荒川」

女 はは！渋いなあ。

男、調子が出てくる。店内とみなされている空間を飛び出し、
そこにある川を見ているよう。

男 今日は先週に比べて水の量が多く速さも増しているようです。

女 上流から流れてくる雪解け水の影響でしょう。近づかない方

が身のためです。

女 なるほど。透明度なんかはどうですか。(出てくる)

男 そうですね。先週は水道水に負けないくらい透明で良い感じ

でしたが、今日はどうも濁っちゃつて駄目な感じですね。

男 ただ例年通りならこの感じは一時的な感じで、すぐまた透明

な良い感じに戻る感じの感じなんで、ま、そーゆー感じっす。

女 雑。(ウケている) では、川沿いの様子はどうですか。

男 ええ。川沿いはそうですね、草ですね。草が生えています。

女 あのー、なんだ。ドクダミとかシロツメクサとか、いろいろ。

男 虫とかがいますか。

女 えっ。虫？そうですねいるでしょうね。やつらどこにでもい

ますからね。僕、虫って苦手なんですよ。もう虫の話やめてい

いですか。

女 (ケラケラと笑う)

男 そんなことより荒川といえば橋。橋ですね。橋がね、かかつて

るんですよ、赤い橋。これがまた見事で……汚っ！きつたない

ですね！うわー。これじゃ橋というより「橋」(汚さを表現)

って感じですね。

女 はは。なにそれ。

男 そんな感じでしょ。

女 もっかいやつて。きれいな橋は。

男 橋。(きれい)

女 あれは。

男 橋。(汚さを全身で体現)

女 (大ウケ)

男 (誘われて笑ってしまうのだ)

女 じゃあ、じゃあ。ここは。

男 喫茶店。(古い)

女	カフェじゃないの。	男	カフェじゃないの。
男	カフェっていうのは、カフェ（オシヤレ）	女	ええー。じゃどんなん。
女	ここは、喫茶店（渋い）	男	進学校。（役者の思う今どきの高校生の喫煙をやる）
女	ほーん。じゃあ、スナックは。	女	…なるほど。（など役者の素直な反応）じゃあ、次！大学生、
男	スナック。（酒やけ）	男	大学生。（意気消沈）
女	スーパーパーは。	女	ええーどうした。それ浪人生じゃないの。
男	スーパーパー（忙しい）	男	違う。浪人生は、浪人生。（普通）
女	幼稚園。	女	普通だ。
男	幼稚園。（幼い）	男	普通なんだよ意外と。
女	小学校。	女	大学生は、
男	小学校。（まだ純粹）	男	大学生。（意気消沈）
女	ほう。中学校。	女	何があつたんだ。
男	中学校。（荒れ始める）	男	大学デビューがうまくいかなかったんです。
女	高校。	女	髪染めた？
男	高校。（タバコ吸い出す）	男	うん。
女	じゃあ、進学校。	女	ピアス開けた？
男	進学校。（変わらず喫煙）	男	うん。
女	いやいや、進学校は、進学校（きちんと）	女	彼女できた？
男	甘い。	男	学科、男ばつか。
女	えっ	女	サークル入ればいいじゃん。
男	今どきどこいったって一緒なんだよ高校生は。	男	入った。
女	はは。そうか。じゃあ、進学校。（いかにも昭和のヤンキー	女	かわいい子いないか。
男	っぽく、ウンコ座りをして喫煙）	男	めちやくちやかわいい先輩に勧誘されて入った。

女 ひゆう。
男 が、彼氏がいた。
女 ああ。どんまい。
男 という大学生。
女 まだまだ出会いはあるさ。
男 ありがとう。
女 (笑う) なにこれ。
男 (笑う)
女 君やっぱりこういうの向いてる。
男 どういうの。
女 こういうしょーもないこと。
男 全力でしょーもないね。
女 ああ撮っとけばよかった。
男 嫌だよ恥ずかしい。
女 恥ずかしい。あれだけやっついて？
男 残らないからできるんだよ。
女 へえ。
男 へえって何。
女 はは。見て。進んでない。
男 (覗き込む) ああ、ごめん。いい加減黙るよ。
女 ええー。
男 え。
女 なんか、もったいないな。

男 何が。
女 ううん。別に。なんでもない。
女、テーブルに顔を近づけて書き始める。
筆記音が響く。丁寧に書いている。
男、女を見ている。
二人、少しの間そうやって居る。
と、男、窓の外に気配を感じ、
男 お、
女 ん。
男 あの人は裏。
女 うら？
男 裏タイプ。
女 あ、懐かしい。
男 うん。
女 どれ。(外を見る)
男 (視線で示す)

女 ……そうかな。
 男 違う？
 女 ぱつと見裏だけど、表。
 男 どうして。
 女 だってスーツにリュックだった。
 男 リュック。
 女 ビジネスバックじゃなく。
 男 ああ、最近多いね。
 女 いやいや、ただのリュックじゃなかったよ。
 男 そうだっけ。
 女 なんとあの、
 男 お。
 女 ザ・トールマン。
 男 ……
 女 え。知らない？あのアウトドアの有名なやつ。
 男 アウトドア、
 女 いや知ってるよ。神戸のでっかいイオンに入ってたもん。
 男 お揃いのタオル買ったじゃんそこで、
 男 コールマン？
 女 え。
 男 コールマン。
 女 私なんて言った。
 男 トールマン。

女 あ！
 男 (女の真似) なんとあの、ザ・トールマン。
 女 (吹き出す)
 男 トールマン、て。なんとあの、て。
 女 (笑っている。声にならない)
 男 しかも、ザて。
 女 ザ、え、ザって、なかったっけ、
 男 ザはノースフェイス。
 女 ザ！
 男 コールマンはただのコールマン。
 女 (机に突っ伏して小刻みに震えている。)
 男 ……ふ。
 二人、それぞれの具合で笑う。しばらく。
 女 はー。
 男 なんとあの、
 女 もういいって。
 男 そうかい。
 女 はあ。
 男 リュックがなんだっけ。

男 あー。たしかに3から2は誤魔化し効かないな。
 女 あ！
 男 はい。
 女 下だけ擦って薄くしたら2に見えるかもしれん。
 男 ええー。
 女 ……（擦っている）
 男 ……
 女 ……
 男 ……はあ。駄目か。
 女 予備あるよ。
 男 え？
 女 多めにもらってるから、
 男 なんだとう。
 女 うん。
 男 それならそう言つてよ。
 女 今言つた。
 男 最初に言つてよ。
 女 （鞆を覗き込み）あと二枚ある。
 男 なんだ。じゃあこれは君にあげよう。
 女 ああ。捨てとくよ。
 男 だめだよ。
 女 え。どうして。

女 記念にとっておけばいいよ。
 男 なんの記念。
 女 記念でしょ一枚目なんだから。
 男 これ記念する人あんまりないよ。
 女 記念すべきだよ貴重だよ。これから何枚か出てくるうちの
 一枚目ですよ。始球式の記念ボールみたいなことじゃない
 ですか。
 男 何回か間違える予定なのね。
 女 なかなかないよ。
 男 まあ、なかなかない。
 女 それか、3が2に直った記念にしてもいい。
 男 直つてないよ。
 女 じゃ3を、2に直そうとした私の努力の、
 男 そんな頑張つてたか。
 女 じゃあもういいよなんか珍しいから持つときなよ。
 男 ええー。
 女 額に入れて壁にさ。
 男 うわ飾るのか。
 女 刺激的でしょ。
 男 刺激的っていうか…
 女 遊びに来た女の子もドキっとしちゃうよ。
 男 まあドキっとするだろうけど。
 女 そういうドキドキは別にいらないうか、

女 なんだ。じゃあどういふドキドキがいいんだ。
男 ええ。
女 どういうドキドキを演出してくれるんだ君は。ん？
男 ちよつとこれ何の話。
女 いやだから女の子と部屋でね、
男 うん。
女 ……
男 ……なんか寂しくなってきた。
女 ん？
男 女の子があ部屋に遊びにくるの想像した。
女 ああ。
男 ほんとに飾ろうかな。
女 ……
男 書き損じてるからね。アピールになるかもしれん。
女 なんのアピール。
男 ……
女 呼ばないよ。
男 ……
女 女の子。来ないよ。
男 分かんないよ。
女 来ないし、呼ばないよ。
男 なんて言いきれる？

男 別に。そんな気にならないっていうか。
女 今だけかも。
男 え？
女 今だけかもしれないよ。しばらくしたらそんな気になってくるかもしれないよ分かんないよ。
男 どうかなあ。
女 そうだよ。
男 そうかな。
女 そうだよ。
男 俺、
女 あ！だめだよ！
男 なに。
女 今。なんか甘酸っぱいこと言おうとしたでしょ。
男 甘酸っぱい、
女 好きな気持ちはずっと変わらないよーとか、君以上の人は現れないよーとかそういうやつだよ。
男 はは。ちよつと渋いなそれ。
女 ええ。じゃあ。君を好きで良かったとか君に会えてよかったとか、
男 聞いたことあるようなやつだな。
女 まだあるよ。またどこかで会えるといいなとか。
男 もう恋なんてしないなんて言わないよとか。
女 おお。前向き。

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女
 何が。
 もう恋なんてしないなんて言わないでしよう。
 次の恋に向かうよってことでしよう。
 甘い。
 えっ。
 甘いよ君は。こんなのつよがりに決まっとうがよ。
 ふ。日本語どうしたの。
 本当はまだまだ引きずる気満々なんだよ。
 ほう。
 けどそんなこと言ったら心配かけちゃうでしょ。
 「この人、私居なくて大丈夫かな」ってなるでしょ。
 そうならないように、僕のことは大丈夫だから気にしないで
 って、安心して前に進めるように強がっています。
 意義あり。
 おっ。聞きましょう。
 俺は「なんて」に意味があると思います。
 と言うと。
 「もう恋しない」じゃない。
 「もう恋なんてしない」とは言わないよと言っています。
 そうです。
 恋なんてと言ってしまったら、この恋を後悔していることにな
 るでしょう。
 たしかに。

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女
 そこを否定している。
 つまり？
 あなたとの恋は素晴らしいものでした。またこんな恋がした
 いと思えるくらいに、楽しい、素敵な時間でした。だから、
 もう恋なんてしないなんて言いません。
 おおー、美しい。
 そういう意味。
 なるほど。
 お分かりいただけましたか。
 はい。良い解釈です。
 うん。
 ちなみに。
 はい。
 私はもう恋なんてしない。
 えー。
 え？
 いや今の流れで。
 なに流れて。
 いや、いいけど。
 あ違うよ。後悔してるとかじゃなくてね。
 ああそうなの。
 うん。もう普通に、もういいやって。
 もう充分。お腹いっぱい。

男 そのうちその気になるんじゃない。
 女 なるかもね。
 男 なるんかい。
 女 分かんよ。
 男 じゃ俺も分かん。
 女 恋する気になる？
 男 かもね。
 女 ふうん。
 男 けど。今はいい。
 女 うん。
 男 しばらく。
 女 そうだね。今はいい。
 男 うん。
 女 書く。
 男 うん。ああ、(鞆から紙を取り出し) はい。
 女 うん。

女、机に顔を近づけて書き始める。
 筆記音が響く。丁寧に書いている。

男、女を眺める。思いつき、女の頭の匂いを嗅ぐ。

女 (書きながら) すぐ匂い嗅ぐ。
 男 うん。
 女 くさい？
 男 ううん。いい匂い。
 女 なんの匂い。
 男 知らないシャンプーの匂い。
 女 はは。なんだその卑猥な表現は。
 男 卑猥か。
 女 ていうかシャンプー変えてないよ。
 男 あれ。そうか。(もう一度嗅ぐ)
 女 もしかして体臭変わったのかな。頭皮から出る。
 男 知らないシャンプーの匂いと、知ってる頭皮の匂い。
 女 あ！(顔を上げる)
 男 おお。(退く)
 女 どの女と間違えてるんだ。まだ別れてないのに。
 男 おお、おう。
 女 どのシャンプー使ってるんだその女は。私より可愛いのか。
 男 可愛い系か綺麗系か。どうなんだ？ん。
 女 (笑う)
 男 いいよー別に。別居してんだからさ自由だよいいよ好きにしなよ。怒ってないよ別に拗ねてないよ。いいいいですよ。いーいーよー。

男 (笑いながら女を見ている)
 女 …ふふ。
 男 すねてるの。
 女 こういうの子どもっぽい？やめたほうがいい？
 男 いいよそのままで。
 女 いいの。
 男 いいよ。面白いから。
 女 そっか。
 男 うん。
 女 こないださ、
 男 うん。
 女 不在票入っててね。佐川さん。
 男 うん。
 女 九時前だったんだけど、電話してみたらまだ行きますよって。
 男 親切だね。
 女 うん。女の人だった。
 男 男だと思った？
 女 そう。佐川さんは男の人のイメージ。
 男 ヤマトさんは？
 女 ヤマトも男の人かなあ。
 男 配達の方は、男のイメージなのか。
 女 ゆうパックは女の人が多い気がする。
 男 郵便局ね。

女 若い人じゃなくておばちゃん。
 男 そうだっけ。よく覚えてるな。
 女 佐川さんは佐川さんだけどヤマトはヤマトさんじゃないね。
 男 なに。
 女 ヤマトさんって感じじゃないと思わない。
 男 ヤマトさん。
 女 ヤマトって感じ。どう。
 男 ヤマト。
 女 ね。
 男 そうか？
 女 なんかヤマトって後輩っぽいんだよなあ。
 男 ちよつとやんちゃ系の。
 女 佐川さんは。
 男 佐川さんは2コ上の先輩。バイト先の。
 女 ああいたの？
 男 ううん。ぼいだけ。
 女 なんだそれ。
 男 つまりは名前の響きがさ。分かる？
 女 (外に気づき) この人は？
 男 この人？この人は、先輩っぽいよ。
 女 じゃなくて、表裏。
 男 あ、そっちか。
 女 俺は表。

女 うん。私も。
 男 おお。
 女 インスタだな。
 男 ツイッターじゃなくて。
 女 だってオシャレだよ。
 男 オシャレな人はインスタなのか。
 女 そんな感じするよね。
 男 ツイッターの人は。
 女 ツイッターの人もオシャレだけど、こう、いかにもって感じ
 男 じゃなくて、こっそりオシャレしてる。
 女 ああ。
 男 この人はいかにもって感じのオシャレ。
 女 なるほど。
 男 あ。ほら写真撮ってる。
 女 花かな。
 男 あんなとこに？
 女 まあ。雑草じゃないの。
 男 見えん。(立ち上がって覗き込む)
 女 あ、ちよつと、
 男 マンホール撮ってる。
 女 マンホール？インスタグラマーが。(覗き込む)
 男 なんだね。いかんかね。
 女 いかんことはないけど。

女 マンホールマニアインスタグラマーだね。
 男 そういうのあるの。
 女 知らない。今つくった。
 男 なんだ。
 女 マンホールインスタグラマー。
 男 なんか垢抜けないなそれ。
 女 マンホールグラマー。
 男 お。豊満そう。
 女 ふふ。豊満なマンホール。
 男 マンホール級にグラマーなのかも。
 女 マンホーラー。
 男 ラーってなんだ。
 女 ER付けると、なんとかな人になるんじゃないっけ。
 男 ランにER付けてランナーとかさ。
 女 おお。なんか賢い話してる。
 男 ユーチューブにER付けてユーチューバーとかさ。
 女 はいはい。
 男 だからマンホールにER付けてマンホーラー。
 女 ほう。この人マンホーラー。
 男 (笑う)
 女 え。そういうことじゃないの。
 男 マンホール級にグラマーてなに。
 女 あそつち。

女 マンホール級で。
 男 重いつてことかな。
 女 硬いつてことじゃない。
 男 それ悪口でしょう。
 女 おうおう。硬いのが好きなんだっているさ。
 男 いるかなあ。
 女 なんだっけ。地域で柄が違うんでしょマンホールつて。
 男 ご当地マンホールというか。
 男 なるほど。集めてまわるのか。
 女 待って。(スマホを取り出し、検索し見せる) ほら。
 男 おお。意外とカラフル。
 女 結構いるみたいだよマンホールマニア。
 男 へえ。
 女 ここのは。
 男 そんなじっくり見たことないな。
 女 (窓に張り付いて覗き込む) んー。よく見えん。
 男 (窓に張り付いて覗き込む) んー…あ。

二人、静止。マンホールに気づかれたらしい。
 おそろおそろ姿勢を正し、とりあえず会釈。

二人、見送り、解放される。

女 …すみません。
 男 (座って一息)
 女 あーあ。にらまれたじゃないか。
 男 え。俺。
 女 嫌われた。
 男 もともと好かれてないよ。
 女 …ふふ。
 男 なに。
 女 …外から見たら、私ら、ふふ。
 男 うん。
 女 こやって二人してふふ。張り付いて。鼻の下伸ばして、ふふ。
 男 ふふふ。
 女 ちよつと。
 男 えっ。
 女 書くよ。もう。終わらないよ。ちゃんとして。
 男 ええー。

女、作業に戻るが、しばらくして手が止まる。

女 予備。
男 ん。
女 予備あるんだっけ。
男 もう間違えたの。
女 何枚あるんだっけ予備。
男 どこ間違えたの。
女 まだ間違えてない。
男 なんだそれ。
女 あと何回間違えられるかなって。
男 二枚あるから、あと一回かな。
女 ほう。
男 間違えてもいいよ。
女 いいの。
男 いいよ。予備あるから。
女 二枚ね。一回ね。
男 二回間違えてもいいよ。
女 いいの。
男 うん。
女 だめでしょ。無くなるよ予備。
男 またもらってくる。
女 別れるの延期？
男 そうなるね。
女 ……（顔を上げ、男を見つめる）

男 なに。
女 変なの。
男 なにが。
女 もらってこなくていいんだよ。
男 線引いて直せば出せるんだから。
女 そうだけど、綺麗に出したいんでしょう。
男 ……
女 やりたいようにやったらいいよ。
男 ……ありがとう。
女 ……別にいいよ取りに行くくらい、
男 違う。
女 え。
男 いつもね、そうやって好きなようにやらせてくれて、
女 ありがとう。
男 そうだっけ。
女 そうだよ。いつも私のやりたいようにやってたよ。
男 俺あんまりこだわらないから。
女 うん。
男 むしろ、いつも決めてもらってたような気がする。
女 はは。そうかもね。
男 ごはん行こうとか付き合おうとか、誘ってもらって、
女 手つなぐのも、私がしたいって言わなかったら
男 しなかったでしょ。

男 いや。そういうことは言われなくてもしたよきつと。
女 ほーん。
男 するよ。したよきつと。そういうことはね。
女 どうかなあ。
男 まあ、時間はかかったかもしれないけど。
女 結婚するのも住む部屋決めるのも、ソファ買う時も。
男 うん。
女 好きなこと好きなように。
男 うん。
女 すごく居心地よかったよ。
男 別にしたくなかったわけじゃないよ。
女 ん。
男 全部したくてしたことだよ。
女 そうなの？
男 したくなかったらしてないよ。
女 二人のやりたいことを二人でした。ちゃんと。
男 うん。そうだね。
女 だから、
男 ずっとそんな感じだったら良かったね。
女 ……
男 今日、久しぶりに会って楽しくて。
女 うん。
男 君も楽しそうに見えてね。

男 会えて嬉しかったよ。
女 うん。だからさつきね。
男 あれ？なんで私ら離婚しようとしてんだろって。
女 ごめん。
男 なんで君が謝るの。
女 俺のせい。
男 ううん。君のせいじゃないよ。むしろ私をもっと…なんだろ。
女 君と一緒にいたくなるような奥さんだったら良かった。
男 一緒にいたくないなんて思ってたないよ。
女 でも前ほど好きじゃなくなった。
男 ……
女 でしょ。じゃなきゃ、あんな感じにならないよ。
男 ……
女 ねえ。ほんとは他に好きな人いるの？
男 いないよ。
女 ほんと？
男 本当。
女 でも私のことも好きじゃない。
男 いや好きだよ。それは変わってない。
女 ……
男 本当に。俺は今も離婚しなくていいって思ってるよ。
女 離婚したくない、じゃないんだね。
男 え？

女 家出てく時。めちやくちや寂しくてね。
男 うん。
女 けど。ちよつと経ったら、ちよつとほつとしてて。
男 あー、結構息詰まってたんだなって。
女 そうなの。
男 もつと一緒にいたいって思ってたよ普通に。けど最近、一緒にいても何話したらいいか分かんなくて。君が何考えてるかもう全然。分かんなくてね。気使って話かけてもなんか上手くいかないし、黙ってても気まずいし。前みたいな感じどうやるんだろつて。結構しんどかった。
男 そうか。
女 けど、いつの間にかしんどいとも思わなくなつてね。
男 ああこれさすがにやばいなって思つて。
男 やばい？
女 うん。慣れちやいかんつて思つた。あのまま一緒にいたら、君に何も感じなくなつてた。
男 だからつてあんな急に。
女 うん。それは、ごめんね。
男 いや。
女 寂しかった？
男 びっくりしたよ。
女 はは。嘘でも寂しいって言えばいいのに。
男 寂しいとか。そういうの、

女 なくなつたか。
男 ー…多分。
女 正直者だなあ。
男 ごめん。
女 謝ることじゃないよ。
男 でも別れたいって思つたことはないよ。
女 そつか。
男 一回もない。
女 でも、私が別れたいなら別れるか。
男 一緒にいるのが辛いなら。
女 ……君は。優しい人だね。
男 ……
女 ねえ。今日会えて嬉しかったんだよね？
男 うん。
女 楽しかった？
男 うん。久しぶりにこんなに笑つた。
女 そつか。ならやっぱ別れよう。
男 楽しくなかったの。
女 楽しかったよ。すごく。
男 じゃあどうして。
女 あんな感じで夫婦を維持するより、他人になつても、会えて嬉しいって思われる方がいいよ。久しぶりに会つて嬉しくて、いろんなこといっぱい話したくなって、話して、笑つたり

男 ちよつと腹立ったり嫉妬したり、解散が寂しかったり、今何し
てるかなって想像したり。そういう相手がいい。私は。

女 ……

男 はは。何その顔。

女 考えてる。

男 変？

女 いや。変じゃないよ。

男 私は。君のこと動かすエネルギーみたいなものになりたい。

女 夫婦でなくても。

男 うん。それより君と笑って話せることの方がずっと大事。

女 そうか。

男 伝わってる？

女 うん。

男 うん。

女 分かったよ。

男 うん。ありがとう。

女、鞆から判子を取り出し、押す。

女 できました。

男 はい。

女 一応見て。

男 うん。

女 ……

男 多分、大丈夫。

女 うん。じゃ、よろしくお願いします。

男 はい。

女 あーあ。これで私も独身です。

男 明日出すから。今日はまだ、

女 お。なんかする？夫婦最後の日だよ。

男 なんかって。

女 夫婦の時しかできないこと。

男 なんかあるかな。

女 映画。夫婦割とかなかったつけ。

男 駅前の映画館？

女 なんかあったよね、そんな割引。

男 あれ。なんで使わなかったんだらう今まで。

女 あれ夫婦50割だよ。

男 ごじゅう？

女 夫婦のどちらかが五十歳以上じゃないと効かない、

男 ええー。そうなの。

女 たしか。

男 なんだ五十歳って。なんのラインだ。

女 なんだらうね。

女 見えない？五十歳に。

男 見えないよさすがに。

女 んー。(男をまじまじと見る)

男 え、見えないよね。

女 (目を細める) 薄目で見るとどうだ。

男 そこまでしなくても、普通に行こうよ映画。

女 お。デート？

男 じゃあ。うん。

女 最後の最後に、君が決めたデートだ。

男 いや今までにもあったよ俺が決めた、

女 いいね。こういうの。

男 ……こういうの。

女 うん。いい。

女、外を見る。

男、しばらく女を見て、女と同じように外を見る。

男 あ。
女 お。

音楽。

街灯。二人と客席との間に小さな灯りが落ちる。

弱々しい光が、徐々にはっきりしたものに変わる。

二人、それを見届け、どちらからともなく立ち上がり退場。

舞台には小さな灯りだけが残り、やがて消える。

おしまい